

# 民俗博物館だより

Vol. X XIII No. 2

1997. 1. 31



牛ひき荷車 ▲

## 目 次

収藏品展

「くらし絵に描かれた生活用具－運ぶ・食べる・住む－」…1

民俗資料聞き書き短信㉔

鬼の伝承と修験道について ……………3

民俗資料聞き書き短信㉔

宇陀郡菟田野町下平井・上平井の宵宮のまつり ……………4

お知らせ ……………5

## 収蔵品展

# 「くらし絵に描かれた生活用具―運ぶ・食べる・住む―」

[期間] 平成9年2月1日 ― 平成9年8月31日 奥野義雄

### □ 展覧会の概要

今回の展覧会では、奈良県の郷土が育てた故辻本忠夫氏が描き続けた郷土・奈良の風景、文化財、くらしなどの絵の内、「くらし絵」を基にした生活用具に焦点を絞った。とくに、ここでは故辻本氏が描いた「くらし絵」に見られる生活用具とその関連用具を収蔵品によって紹介していく。

故辻本氏は、安堵町に生まれ、若くして県内の歴史・考古・民俗にかかわる文化財や郷土の歴史に心ひかれ、描き続けた作画の内、「くらし絵」に見える風物や生活の情景画は、今日では見ることのできない「くらし」を描いている。たとえば、牛ひき荷車でものを運ぶ風景、人びとがモッコで土を運ぶ情景、駅前で人を待つ人力車の光景などの「運ぶ」用具や土間にあるヘツツイ（クド）で食べ物を煮炊きをする人（女性）の情景、豆腐を買い求める人びとの居る豆腐屋の光景などの「食べる」用具、そしてアンドンの明かりの下で縫物をする情景、火鉢を囲む人びとの光景、コタツに用いるタドンを作る情景などの「住む」用具は、今ではまったく見られなくなっ

てしまった（今回の収蔵品展では、用具は紹介しないが、村内を流れる小川で洗濯タライと洗濯イタ [板] で衣類を洗濯する姿は、現代社会では見られない）。

今回の収蔵品展では、このような「くらし」の情景・光景を描いた写生画を、便宜上「くらし絵」と呼称して、これらの「くらし絵」に描かれている人や物を運ぶ用具（人力車やカゴやカバン、他）、日常の食生活用具（箱膳や米びつやおひつ、他）、そして住生活用具（アンドンや灯台やランプなどの照明具、コタツや火鉢や足・手あぶりなどの暖房具、他）などを紹介する。

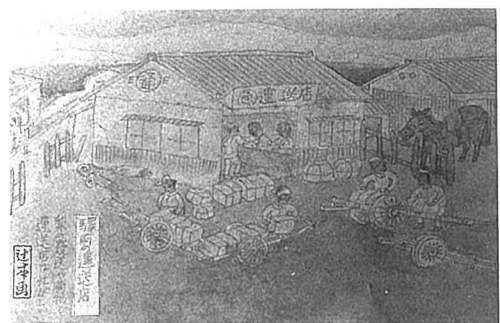
数十年来故辻本氏が描き続けてきた「くらし絵」と生活用具から、大正時代から昭和時代に至る生活の情景を垣間見ることによって、往時のくらしぶりを理解してもらうことにある。そして、今回の収蔵品展の展示構成と主な出品資料についての概略を掲げると次のとおりである（展示資料点数約130点）。

### ① 人・物を運ぶ生活用具―「運ぶ」コーナー

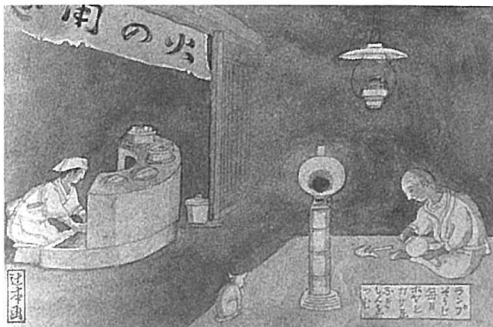
◎ 「くらし絵」に描かれた物を運ぶ情景とその用具を紹介する。



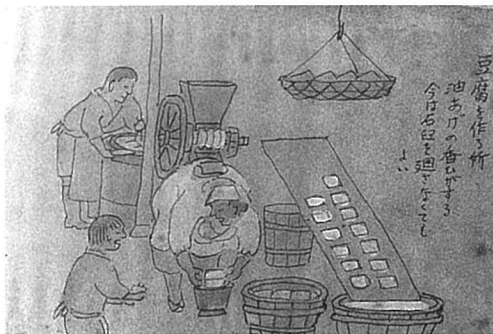
▲ 駅前の人力車



▲ 駅前の運送店



▲ 台所の煮炊きとランプのホヤ磨き



▲ 豆腐屋



▲ タドンづくり

○主な出品資料には、大八車、人力車、山カゴ、モッコ、カバンなどの用具がある。

○主なくらし絵のパネルには、峠を越える荷車、駅前の人力車、駅前の運送店の大八車などの写生画がある。

②物を食べる生活用具―「食べる」コーナー

◎「くらし絵」の中には、描かれている台所や井戸端の情景などの用具を紹介する。

○主な出品資料は、水メガネ、水屋タンス、箱膳、おひつ、弁当箱などの用具がある。

○主なくらしの絵のパネルには、台所や井戸端の情景、包丁磨きの情景などの写生画がある。

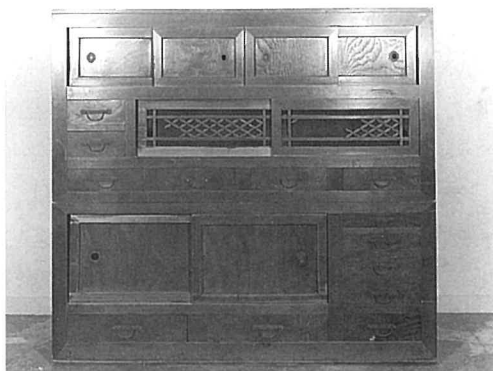
③住まいの生活用具―「住む」コーナー

◎「くらし絵」に描かれた住まいの情景とその用具を紹介する。

○主な出品資料には、各種照明具（ガントウ、アンドン、ランプ、灯台、提灯）、各種の冷暖房具（コタツ、ユタンポ、手アプリ、火鉢、扇風機、ウチワ）などがある。

○主なくらし絵のパネルには、ランプのホヤ磨き、アンドンのそばでの縫い物、タドンづくりの情景などの写生画がある。

以上が、今回の収蔵品展の概要であり、すでに述べたようにこれの「くらし絵」とそこに描かれている生活用具などから往時（大正時代から昭和時代に至る時期）のくらしを垣間見ていただければ幸いである。



▲ 水屋タンス（当館蔵）



## 鬼の伝承と修験道について－生駒市鬼取町の伝承を中心に－

奥野義雄

奈良県内の鬼に関する伝承は数多くあるとはいえないが、いわゆる春迎えの行事習俗である綱懸けや弓打ちに「鬼」にかかわる伝承がみられる。また、元興寺にまつわる鬼＝がごぜの伝承がある。この「がごぜ」の伝承は、近世の記録に現われるが、近世以前の記録にはいまのところ現われてこないという問題を内在させている。

県内で鬼に関する伝承でもっとも古いものは、『続日本紀』（巻第一）の文武三（699）年五月二十四日の条にみえる役小角が鬼神を役使する話である。すなわち、「伝て云く、小角能く鬼神を役使して、水を汲み薪を採らしむ。若し命を用いざれば、即ち咒を以て縛すと」という文言がそれである。この伝承の前段には、はじめ小角は「葛木山（葛城山）」に住み、呪術をよく使うので有名であったと記述され、金剛葛城山系（葛城山）に住んでいたことがわかる。

このように県内の鬼に関する伝承には、古代にまで遡るもの、近世になって記録に現われてくるもの、さらに時期不詳であるが、いまも伝承され続けるものがある。また、鬼の伝承に修験道（役行者）が結びついたものがある。

いくつかの鬼の伝承の内、調査事例の一つをここで紹介することにしよう。

\*

\*

奈良県北西部にある生駒市鬼取町には、「鬼取」という言葉どおりの伝承が遺っている。鬼取町は、生駒山の東麓にある小さな村である。ちょうど生駒山頂にある電波塔が立ちならぶ東側の山麓に村は位置する。

この村で「鬼取」の地名の由来（伝承）を二つ聴くことができた。

その一つは、生駒山の中腹に薬師堂という

小さい堂があり、むかしそこに二匹の鬼が住んでいた。鬼たちは、小堂の前の道を通りかかる旅人の金品を取った（盗んだ）あげく、人びとを喰って生活していたが、小堂に立寄った役行者によって、鬼が捕り（取り）おさえられ、改心させられたという伝承である。

この伝承には、「鬼が（金品を）取る」という〈鬼取〉と、「役行者が鬼を取る＝捕り押える」という〈鬼取〉とが重なっている。

次に二つ目は、生駒山の中腹にあった薬師堂に、かつて役行者が住みつき、修業をしていた折に、悪い鬼たちが現われて人びとを恐れさせ、悪業を働いていた。鬼たちの悪業をただすために、役行者が法力によって改心させ、鬼に厳しい修業をさせたという。鬼たちは、役行者による厳しい修業で大いに涙したため、涙が川となったと伝えられている。村内を流れる小さい川が伝承の〈涙川〉であるといわれている。

この伝承は、役行者が鬼を捕り押えて改心させるという内容のものであり、「鬼を取り（捕り）押える」という伝承が土台になっている。

二つの伝承は、もともと一つのものであったと想定できるが、一つ目の伝承は、二つ目の伝承の一部分であった可能性を残している。しかし、この想定が事実を明示するものかはさだかでない。

ただ、この「鬼取」の地名の伝承には、〈役行者〉が介在していることは確かである。そして、その行者が改心させ、修業させる筋書きは、すでに触れた『続日本紀』の役小角が鬼神を役使する話と重なり合うのである。だが、この役小角－鬼神と役行者－鬼の伝承が同一のものであるかは明確に提示しがたいところであろう。

# 宇陀郡菟田野町下平井・上平井の宵宮のまつり－神饌を中心に－

浦西 勉

菟田野町下平井・上平井の集落は、芳野川の支流、平井川の最上流に位置する山間村である。本来ひとつの村落であろうが、元禄八年（1695）当時、下平井356・731石、家数35軒、人数163人、上平井村212・06石、家数27軒、人数128人と二つの村落として示されている。注①

近年まで農業中心の山間の集落である。この村の宵宮のまつりを昭和50年（1975）10月20日と、昭和52年10月20日の2回見学させていただいた。充分詳細な調査ではないけれど、神饌に関して大変興味を持ったので、そのことを中心に少し報告することにする。注②

## 1. 下平井の宵宮のまつり

下平井の氏神、皇太神宮は神明造の三間社朱塗椋皮葺。10月20日は宵宮と呼ばれる。21日は古市場の宇太水分神社の秋まつりで、この付近はすべて、この日が秋まつりという。村のまつりの実質的なのはこの宵宮である。まつりの当屋はオトウヤ・メトウヤの2軒が当り、1年間の神社の世話をする。例えば、正月14日の日待ち・春の宮参り・八朔の行事（9月1日、昼のねあげとって、苗代の初まきから昼寝をしていたのが、八朔で終る。）・新嘗祭・山の神まつりなどを中心になつて行う。

その内、この10月20日の宵宮のまつりが最も大切となる。昭和50年のオトウヤは三井戸昭司さん、メトウヤ山本宗五郎さん。この日、オトウヤの三井戸さん宅にて、午前10時頃よりオシヌキというものを作る。米3升を三等分にして1升3合3勺の赤飯のオコワでオシヌキを作る。オシヌキとは1升3合3勺を台型の舂の木型に入れて上から押し作るので、これを3個作り、2個は皇太神宮へ、1個は次の当屋に渡す。オシヌキを作ってから11時頃、海・山・里の御供と一緒に神社へ持ってゆく。オシヌキは神社に供えてから村人が箸でついでいただく。

祭典は、神主（宇太水分神社の神主）・当屋2名・宮総代1名・評議員5名が出席。祭典が済み、メトウヤが作った餅の御供まきをする。再びオトウヤの家に行き、次の当屋を定める儀式が行われる。タイマ（大麻）でお

祓して名前を書いた小さな紙をふり上げる。当たった当屋と今までの当屋4人は盃を交代して飲みあって、当屋が移される。オトウヤの家の床には、

天照皇太神宮  
南無妙見大菩薩  
春日大明神

と書かれた掛軸をかける。

この下平井では、台型のオシヌキという神饌が珍しい。

## 2. 上平井の宵宮のまつり

氏神は八王子神社で、村の高いところに春日造り一間社朱塗。寛文十一年（1671）九月造立という棟札が残る。上平井は氏子24軒で、宮座には24軒全員入っている。当屋はオトウヤ・メトウヤの2組がある。

戦前祭礼を行うための財産として田、7、8畝あったが、今はない。オトウヤは1年間の氏神の行事を行う。メトウヤはその補佐。氏神の行事は下記の通り。

正月の門松・しめ縄・かがり火の準備。

春の宮参り、豊作の初種を供え豊作祈願。

8月17日 百燈明あげ

宵宮・秋まつり

新嘗祭

この上平井の宵宮には珍しい神饌（後述）が作られる。朝からオトウヤの家にて、本御供やその他の神饌が作られる。2時から神主に来てもらい、祭典が4時から社務所にて座となり食事。その時、次の当屋に当屋渡しが行われる。夕刻まで食事をして、7時頃にオトウヤ・メトウヤの鍵渡しをして御供まきをする。この御供まきを待つ間、甘酒と大根の塩づけを食べる。

この上平井で古風を残しているのは神饌である。御供を供える箱が二つ残り、そこには「八王子御膳寛文四（1664）辰年霜月」と墨書がある。その内側に「柿・ザクロ・芋・トコロ・餅・栗・大根・甘酒・白ムシ」と9品の神饌名が書かれている。今もこれを本御供・ココノシナのゴクとか、ヒトメ（人身）御供ともいわれて供えられる（図1・写真1）。ザクロのすっぱい味が人の味がするとか、この9品の神饌を食べると人の味がするとかいう。

その他、二股の大根とカマスを膳にのせたもの。これはオトウヤが引き継ぐ時の儀式に使用する(図2)。

また、村の宮座の人々の食事にも特定のもものが決まっている。一つはオシメシ、これは梗と糯を7対3の割合で炊き、四角い型に押し作って高さ5センチ程のもので、これを二段にしたもの。

二つはニシメグシ。大根・アゲ・コンニャク・サトイモ・チクワの炊いたものを竹串にさしたもの。三つはカマス。

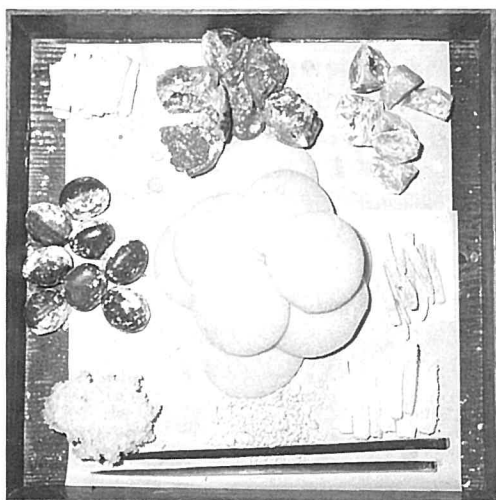
上記の3品が宮座の衆の食事である(図3・写真2)。

末尾に、この神饌のメモを報告しておくが、秋まつりの儀礼が廃れたとはいえ、この地域には神饌などに興味深い文化が残っている。

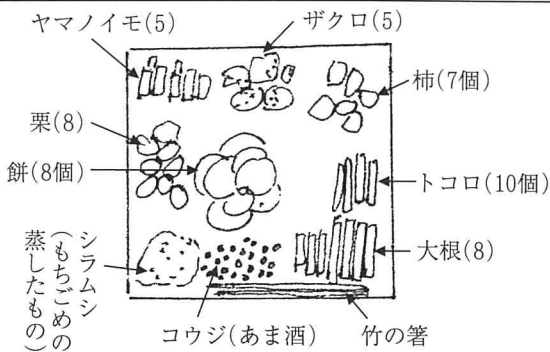
注① 『宇陀郡史料』による。

注② 上平井・下平井の次の方にお世話になった。心から感謝申し上げます。

森野三千三氏 倉窪保雄氏  
三井戸昭司氏 山本宗五郎氏



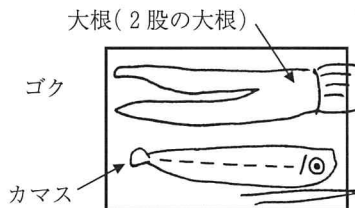
写真(1) 本御供



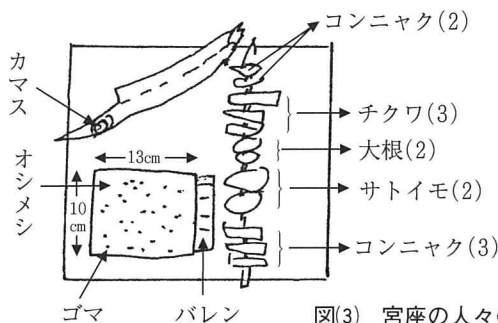
図(1) 本御供



写真(2) 宮座の人々の食事



図(2) オトウヤ交代の膳



図(3) 宮座の人々の食事

## お知らせ

### ■ 収蔵品展

「くらし絵に描かれた生活用具  
一運ぶ・食べる・住む」

期間 平成9年2月1日～8月31日

### ■ ワークショップ

- 2月9日 収録映像上映と解説  
「見瀬町のお網はん」
- 3月1日 「収蔵品展、展示解説」  
ワークショップは当館にて2時からです。

### ■ 民俗博物館講座

演題 「民家と暮らしーその3ー」  
人里の植物

講師 瀬戸 剛(元大阪市立自然史博物館)

日時 平成9年3月16日 午後1時30分～3時30分

募集定員 60名

募集期間 2月16日～3月2日

応募方法 往復葉書(応募は1人1枚  
住所、氏名、年齢を記入)